



をれ日

信濃何丸撰釋

凡端書れるるる一白よ光りを流るるり又を一白
中え善きこの又を物ゆ一白ハ成りしこのの
可るり一端書るるる海魚さく白よを例の
六指るり一端書るとかるとを思連しするるハ
程うさくする一さ連と出の端かよる侘人の
二字を字眼とす侘を耻言之切ヨスルなり此
端か有しとも一白を字えたりを物故よ出の
白を成りつるやといふより狂歌の才士をハ歌ハ
しあひぬ侘人の二字を字眼にの歌を下心
よつて字をまづつるよりれ字眼なり

冬 一

狂白本う一れ身を行交よ似るる

消あひぬう侘るる人の林れいりよ身をよこら
しれ流のるは侘言家ハ此歌よれおひ念守連
ハ中し字よ有あひるるさ又歌ハあを連れ紫
よくしあ歌を吟しつ一して白情れ細子を感す
魚一正風典立の一白をれ日一部の大事なる事ハ
法説まらしるる第一狂白の二字をよめぬらよ
しるといふる惑説なりと知つしを後よる狂白
の二字をよめぬらよとありよらつてのるり歌
魚をよめとるるの目端れ二字をるり五巻
めれ白ひよ秀白れ重とハ狂白れ對をぬるるの
るり一白まの甘を巻る角も山菜花もやるる
本ししと書てよ此か白と眼とをうけぬる
るるも知つ一甲子吟切の本書る當國

松本より出て来良井一ゆはりのその後江戸一交易
して南河を伊勢の浄師何り一れ毎に臨鏡をり
やはりの犯る来り一と書はけりてあり次は竹
舟のふるを知苦舟と書てや一医老とりしれ
淫術あり臨よる三々雖知苦舟と早下一
まより手竹舟をけりるや此をまは次舟一病
家もさうすくありゆき一業のもの一し一しきり
をえりきりて徳をを狂一狂一狂の奴と
ありの才をゆきまより一あり祖孫を武成
よるありあり一不才の世一して例の士一あり
れ一や一医と同前あり既よ知信庵の記よき
仕女を余の地をうらやむと評よ一い一はく
主人よれらまはれはるまをえりきりての
中犯信逸あり一して終よ俳諧の奴とありその目

のあし一し一きよいれかこるひ紙衣れ中よま
まどくあるまよみお母えり昔狂歌の才士行ま
ゆりのまのむを中程を一まよよおのい合を
行高と親方と不肖ありりれ似てあり一と親
一まつらありり一書よ似るるまらうき一ふあり
といふ説を甚しき一ひらまとありをま後よい
類のふもて本名を抄のふありまを抄てきけ
えり一ひらりせり一ひのふと唱るまはひ
り一ひらり傳よ日あり一ひらりまを服又
る一ひらり天地自然の理あり一大事
あり象る似てありを一ひらり一服よ一ま
や一ひらり一ひらり一ひらり一ひらり一ひらり
傳よ一法よ一ひらり一ひらり一ひらり一ひらり
は決り一ひらり一ひらり一ひらり一ひらり一

昔より新いさひをとりてを規矩とせんとぬを
とらぬよひなり
昔の書曰さひをとりて一書も世撰の書もそり
人甚用換れ入りおあり大い支考りあひま
るを混りて逆毒をとりぬすくぬくひあ
る

たそやとけいふ書れ山菜花

一書も後やとせぬとすなりよむとたぬり
とらぬよひなりぬすくぬくひあ
る
たそやとけいふ書れ山菜花
一書も後やとせぬとすなりよむとたぬり
とらぬよひなりぬすくぬくひあ
る

とまことしとせりぬすくぬくひあ
る
たそやとけいふ書れ山菜花
一書も後やとせぬとすなりよむとたぬり
とらぬよひなりぬすくぬくひあ
る

考曰白のたとへる山菜花と人ともうけて
依りたるあり二るれるのほよ白のたをてて
ふふ一 愚考とす一飲を花ハとらあり
有り炭後ふま角れとけふふ新ふ白のた
う然又曰のれぬのまら并にくうふふれうふ
あゝまはけふ花道の志のつら實細々々と
通音るるあり一ふふらら山菜花を待や花せり
と替へる服るる一書ふふふ山菜花をてして
ひらひらるるをそやと紙をてて服るるとハ何
るうて紙をてるるをそのやうふ人らの花をてふ
を待るるの第一を連てて服るるう山菜花の形
よりるるあり人れ花をてて山菜花のとい
らるるありとすしと人れ花をてらるる魚手
人れ花をてるると此れをも利走とハ知れると注

すらすれし高徳あり

考曰れま水小酒をほらるる

一書ふふふありて酒をほらるると云々
さふふありて酒をほらるると云々六条本報寺れ役人
酒をほらるると云々又一説ふありて酒をほらるると云々此
とい入酒をありて天子一上酒をほらるると云々此
説も又叶もれ酒をほらるると云々此とい入酒をありて
るや又曰堀川卿小政等田舎とい入酒をほらるると云々
明とい入名酒ありて是ありとい入酒をほらるると云々
又一書ふふ水司ありて酒をほらるると云々此とい入酒を
草つるふといふて酒をほらるると云々此とい入酒をほらる
よて酒をほらるると云々 愚考とす水造酒
を造るといふる非るる穢原よ曰孝徳天皇
大化五年始て八省百女を並八省の中宮内

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典茶寮
 掃部寮正親司内膳司造酒司采女司主
 水司皆是宮内省の部ありて八省定る
 時造酒司主水司此二吏を飯をりぬま司
 の造酒司を急帶すまは酒の作り
 ありといふを神代卷曰吾田鹿草津姫卜定
 田を号けて校名田といふその田の稻をりて
 天甜酒をりて嘗之又太田命傳記に伊弉
 諾伊特冊尊所生和久産巢日神之見豊守
 賀能賣神月天より降坐善酒を醸ふとい
 神代より造り來り酒を主水と名けてはけり
 いふまはるる一全体酒をけりといふ白ふ
 酒を主水と名けり一説は酒やけりといふ
 やらうといふありといふを福守りまたらぬ説也

又一書ふ行旅と主水とを歩越るなりといふ
 ありしころとて主水をけり行旅と名けり
 といふは主水を眼蓋友老を非人倫るなり此
 數物なくともあるまはけりといふ志く
 尋常曰主水を水よりけりぬるまはけり
 酒をけりといふ謂ふ

一しられけりしをぬりし赤馬

魚考赤馬と限りしころよ海を意味あり主水
 よ酒を造らすりし都りけりといふ定めて万葉
 記飲まりし極めりしものありすしころを神代
 しをりし赤馬のころとて田井を都と名けり
 といふ是をりしころとて酒を造らすりし
 赤馬りし色をり面白しをり注すりしを
 赤山曰五穀内より西の俚言よ酒をけりしを赤馬

ふ家といひはれよけ何酒店へとりり飲を赤るふ縁
て往よといひ是酔の興よまうしてそのすむを
るる一

胡解のなまらすきれ自ひる死

考る日陽氣初てうすくありてこのまききをふ
わひといひ胡解すきよ限らひはまよふれ間
しすみきりてうらめれなり是酒の本姿也
愚考源氏よま行のりまよと解くはよまはま
目のあやひて竹れ紫の膚をまよひるうら
毒ようらたれしよはめきうらめくまのり細
すきまをばよひぬらうらまうらやうたれてや
日れうはらるまをまよひるまよといひぬらう
るり程迹多れはるまをまよひるまよ一又万紫
の抄よ仙えまぬとま自まよはげしていふこ

よかひとるまきよよはまてりいひ初るりとま
赤るよ自ひれうはらいと腐あり

日れらあしよまよまをま

考る日まをまをまといひ一の鄙言ありいふ西海
のま鄙よまをまといひはまよて達縁るり日れら
を日れままよまをまといひる形あり

我々るまをまをまのまをま

一書よ業乎れ使るまをま見出して思ひて髪をま
やすといはらうてうらう一ま五申將二条れ台い
まをまといひてたりまをま荒淫よまをまてせま
うら業平能の髪を切てまをま業平髪をまを
やまといひるまをまをまをまをまをまをま
と吾妻れら一まをまをまをま 愚考まをま

荷よりのほつき業平船はの侍よも似りや
うきと髪をとんやすとりみろよして三つれや
子をゆつひきしり伊勢のうらりよむりし
心はきつて色はのみあるをここき周といふ
よ衣はつりてきりきりこれと船のうらり
宮へよよよとちき女よのいぢりちりき
と田うむむとてはの男あるをいひみし
すきとせと志とやとてあはるわい入る
と書いとま一書還俗れ人とりよ非るり
いほをゆめのつらと乳をきりす
かきあそことばよすことしと位
新法の曉さく火を焼く
一書日ひろりよことんまじりあるの異る
うらりをうけて髪をきりまはるる推き

りのまろし引とまきまじり女侍よ見ると
次々ゆゆし乳をとすつらとりよ一人の髪
子をうらりちり女房もきり見るといす
款渡れ文字の消もゆりあたまきりさ
見るとぬし一國西れるるる人りて花のむ
色ゆゆし後家ゆらりしりんまじりサ哉
れうまじりちりまそとほをのりま
すりよあまのり
子の侍の服よすりていうま誠とたれま
の髪ををゆりしり海切りしりま
るるまじりやあまのりて服を率都樂とみ
消うまじり消ぬるまじりてはけれま
まじりるる二るの同よまじりるるの
あまれ儲の字まじりゆらまじりるるの

いふもれありぬ所とりよるるあひよさうけりるる
とまき 魚考虚實此西端よまのりきてはまふふ
ゆはる

あつしるるまふふをえし虚家
田中形の小万の柳あつまろ
あつふふねひくく人ちちむとつ

魚考小よむ柳を津必田中ありあるれら
家をと芦荻の侍と見て小万 柳を寄つるこ
芦を津必必にれ芦ありてふふにの一名よあて
濱川のすちあり大ねれりりよえむり
まぬして位危ありよよはししとむむとま
お美のふまをれりて女育るる家於一出て
まふしとまこまるよはよ芦ありて世の
まはるまことすよのものこりよゆはちて略す

後の白くその場のけりして濱川の魚考こ
むしよあ伊勢の浮例と説きあまふ大形る
杜撰るりすしてけりるを希るを吟味しけ
後れ附まよまをるを入てんまきこるまの本
意よまむむれみちるり今すの俳諧のうま
まねはるるまきこるのみちるむするそ

とるりまきしけけりまのり
二のたよをまのたれまのあきく
まらまむらりまらりあ鼻らむ

一書曰一鶴二鶴の女中尼よるりこるを一の尼二
の尼とりよその尼の所家より希くまらま
その尼よあ盛の母のぬりるをまきよまらま
まらまむらりまらりまらりまらりまらり
まらりまらり 書曰とるりまらりまらりまらり

ゆのさうりすむ所の申儀ひときよ一の尾と
より下り居してまむる一一の尾をおれ
法所をわわするむを吹道よりきよ一西ふ
言仕を一一の危れる危うくして位不はね
とめて討つるねむ一の危宮中れはねむ昔
る危うく討つる一一の危ふ近慮の危む
うふまゝの危や物の毒の危むいうふちを
りてより後のころをいほね回るむよわ
まき丹のりりあてやとなくや病一危む
一の危月雪のまよりのまきまきまき
皆をいへるも君とみれくま仕のむ一を
志のいれまよとていと危後一てめいの
女の危るるまゝの危や此西人とよま
ま女危れまきいよ及まき、鼻のむハ俗よ

を鼻すりりして泣きあり 愚考を鼻曰涕
左眼曰涙いりまきまきまきを
歎く時を涙自らを声をも吞て悲泣する
涕鼻より出るなり則ちまきまきを流
むるなり

まよれまきすく敵おろるなり
いりり恨の矢をばねるなり
一書よ晋れ豫懐の主君の仇をむくまむ
よまきまきまきをいへて討つるなり
又まき韓信よたのまきまきまきまき
志のいり居て鉄槍をまきまきまき
愚考豫懐のまきまきまきまき
の夜をいへて抜劍三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏劍自殺又韓信まきまきまき

始皇をうつつとる人遠ひるる一秦韓を不
ろかして天下を一統す張良倉海若と漢り
て争さ百二十斤の鉄槌を以て始皇を博浪
沙より片あやまりて副車よあつると史記復苑
等よ出たり定てまのるむ此處より刺客
鉄推さくふら衆れ沙汰る一是よひつらの附
まをいづく故事決り口清水の以美濃也源頼を
信濃より任り三浪守鹿を信濃杯よ任す時よ
美濃と信濃の境三坂といふ所よて籠りあふ
その以木乃れ山中よ妖怪ありた狒孫の精り
て神代より住るまて神通変化きこるり形守
鹿の毒白菊も容貌玉れぬ一妖怪山神も志
め合きて白目を奪りて黄昏とる一路よ
旅鼓を歌り守守守一旅家よ一宿すとすふ

夜中白菊をうつら一目をめて見事な花しころ
也子れ中るり守鹿島等を引使り山中よ
分入てりともまると終よ探りぬん時よ浦島
森元の森よ三依道人といふ人あり是よめとめて
吉凶を占ふり吉ありとあるぬよ前供人をいへ
らひ近習業物をこのこみ玄関よこす鳥帽子
壺出りて立出る次の業おもく美羅麻の婦人多
くうは子て容殿よ通るよりて見すりて女房
の白菊るり守鹿思ふぬり及人のいの妖怪の
所ありまるとるくまの士あり女房の敵さむるれ
と目あり手練の一東三前きりて引志ありつ
けさるよ切てりれ彼士三筋の矢を左右の
と口よ更とめてさ何れぬ体あり彼妖怪人命敷
やまてりて目雷よ打はふまをて死たり

これん此幸ふま夫婦全うして終ふよお羨す
物といひ矣ををるりのありといひ又次れ白よ長
範う松を傳へこれんその場ををりたるの此れを
書畫といひよも白菊れ故るりたるのと云く陸佃
得雅曰猿性靜猴性躁至所林木振響云々
抱朴子曰猴一名胡孫云々

盗人の記念の松の吹をれ云々

一書よ美濃国熊坂の物見の松ありと云く
愚考中仙道赤坂の西あり古松を枯て今
のそ享保年中よ枯るるりを西のいかに
るく赤勝よ整茂寸非情の松よいよ
ををるるる一あり

志はし宗祇の名をつけし水

一書よみのく必郡上郡山田庄宮瀬川の邊に

此泉を赤井列宗祇法師よ古今傳授
早てあのをよまておろりまむわ歌を詠をら
ましとるり又此泉を白雲水とまひよ
宗祇を白雲水といひゆへありと云く

必と脱てを記よもあむ水時る

一書よ宗祇のちよまのちをさうに忘れの
るるりのれ

志はしとるるる人れ骨の何

鳥絨をさひすの必れうらうら

あむまの謎のまときけし時る

一書よ骨の何といひをさうまていやくし人の
骨のそらあむる鳥絨の甲あり龜の甲ハト壘
よ興ひて吉凶をさるるむ鳥絨の甲を胡必の
うらうらよよのまのちとるるる上て占ふと云く

一書よ希の人の骨の物としりるをいづく度毛
吟一して見晒骨里あしして古戦場あり
と見たの儀ありその鳥緘の甲外くも胡虫の
占とする事とやと云く 一書よ謎る占の對
附あり一希のれむ法一を謎るといふ
ありて日待り庚申待るもたの事と
つとく云く 愚考此三のれも
侍有り詐龜卜れ来由といふ史記の龜策傳ふ
曰自古聖王將建國受人命興動事業何嘗不
筮卜筮以助善唐虞以上不可記己自三代之
興各執禎祥塗山之地從而復啓世龜燕之卜
順故殷興百穀之筮吉故周王王者決定法疑
參以卜筮斷以著龜不易之道也蠻夷氏堯
雖無君臣之序亦有決疑之卜或以金石或以

草木國不同俗云く又酉陽雜俎曰昔秦王東
方少影ひて善の袋を海より舟り出して魚と成
故よその形等袋の如し又南越志の云此魚を鳥
緘と号ふも其性鳥を好むいと水より浮て
よは鳥のさきをきりて死するとして是を啄む巻
て水中に沈むて是を嗜ふ故よよくと書と云
彼流罪の人をぬ漬込ふ出て道通すまは何
やららるるに白きものあり小川の骨の物と心
かよくもとり何ぞもて好むに骨の物といふ
甲有り幸哉身れ後ををよくも流をれれと
るよもよもよくもよもよくもよもよくもよもよくも
昔秦王之等袋出して有りける魚と云く胡國
のうらうらうらもよもよくもよもよくもよもよくも
よよあつたまるともよもよくもよもよくもよもよくも

我も此地よめて昔よふるむらと夢より眼前に
まらりぬらきまきし鳥械の甲も手はくろり此杜撰
もそあらくて海きこりともろり又固物難想白
杜鶴初鳴の甲先固者遇別難悲又華陽風信
記曰杜鶴春至則鳴先固者有別難苦皆く
海きこりともろりのありるを何しよるうく
林水一斗 あり けくす 夜ろ

一書よ是曲そのむかちり謎といひ字を答て
林の夜のそまきこりまを附り水一斗よ漏刻を
いひまきこりまのあり 一書よ林水を酒ちりまきこ
るといひはシサスイとよむ 一林を固のう
まて金氣ちり西を固ちまきこ散水よいよみの酒
をまき酒の字これまきこりまのあり一斗あり
はくす酒 考ありとまき 愚考林水を酒

と見らる非あり一巻れうら酒の注法二つ取
及ら心や先注のめく漏刻よまきまの事林廣記
よん刻漏制度黄帝創漏水制器以分晷夜本
於よそそ天智帝いよむ太子れ時をめて漏刻を
並よみて何刻の証をうらま

日東れ李れり故よ月をえんて
一書よ酒ぬる清らそけり人を李れくくとま
らまきよいよるり盧公と抄れくま 一書よ
李れを文山ちり石川文山を本於清の名人よ
て不國よそそ日東れ李れと廢称をくま
成美曰素堂家集石川文山の詩仙堂を尋
といひ詩六言六句有先尋日東李杜靜對
中華仙顏山鳥啼長松村野客入志梅関
詩無於何まぬ泉石前翠下襪間

愚考日東之シツトウとよむ一唐書曰日本之古
の倭國之去京師一万余里新羅の東南小苗の
海中に在て東西五千里小行南北三千里小新
國の城郭あり木を聯て柵あり守字を以て一
漢其俗女多く男を少く文字あり浮國法を以
てその俗推於告あり一守符帶あり一髮を後小
結く一倭の名を思て号を日本と更む國日の
出りあり一守一とよむ名と守 寒松曰先哲

叢譚小夫山初年 善翟曼氏後介羅山
字醒窩門一從奉斯文才亦長於詩朝
鮮禮式稱為日東李杜云物徂徠亦曰
東方之詩杰也 愚考吳城又有二乘寺号曰
凸花石公偉偶云凸感其地名同而諱字相偶
自号曰凸窠一故日東の李白の坊といはれり一

巾小本 櫛をんとむ 毘毘 打

一書小服此是山菜花とあり又巾小本
櫛をいづくといふ櫛は髪を束むる服の山茶花を束
むるをいづくといふ櫛は髪を束むる櫛の体
状のものをいづくといふ 一書小因之送奉曰汝陽王
進管載硝帽亦曲上自摘小櫛簪置帽上遊滑久
而方安曲終花不墮嘆曰花奴 一書小從毘毘打を
織人ありといふ 東坡の詩小汝陽真人給帽著
紅櫛 愚考打を撃るなり 歐陽公歸田録云打字
當音滴从手丁丁亦擊物声擊手音執扣也打也乞
られ字義ありしや一とよむ一とよむ一とよむ
考侯文政大に所載其の西國一流罪のそ此宋為れ
此毘毘一面をとりき居て櫛を反強を打るなり
多りといふ 櫛を打るなり月名の席一織人あり打を

うつり本權をうきしついでいぬのよきいとをうきつた程
の心ほよして御徳をうきつらうきつらうきつらうきつらう
はつり

うしこれゆりよきれゆりよきれ

一書よ大ねれつりよ南院の介君をうきつり
牛をうわよやわまひをきつりよその牛をうきつり
やうすつりよ今君一それれを彼をうきつり
我のわしつりよとや滑よきつりよ
ふはゆれいのらまとき 無考あしつり
大きたつりよはまきつりよつりよつりよ
等よよきつりよ牛侍の侍るりよおれよあつり
園よよきつりよ牛侍よよきつりよ
見よよきつりよ大つりよ堂を建てて延勤をつり
長つりよつりよ大つりよ堂を建てて延勤をつり

てんころいふつりよの牛をうきつりよ
いよしつりよつりよつりよつりよつりよ
きつりよ西れ系よつりよつりよつりよ
紫めよ當入涅槃法仏菩薩壇場時結縁と
見よよつりよ六月九日二日入つりよつりよ
日よつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
めつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
勤供よつりよつりよつりよつりよつりよ
二日よつりよつりよつりよつりよつりよ
いよつりよつりよつりよつりよつりよ
巾をいよつりよつりよつりよつりよつりよ
を結よ一人目立てて蝶九れ宮ろつりよ
人よつりよつりよつりよつりよつりよ

ねりといふ北年いまだ衣を振るひ
一書ふ杜子美の老大非傷未拂衣といふ此意
を合する前書なるなりといふも非なるなり 一書ふ前
書れぬ振衣子佩固濯足万里流と思ひれ後
ふ於津洲の國しを強島の名蹟古迹を遍歴
して泉石をいほねてと云々 曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壮
えり書れぬといふは袴をきつてぬり

一書ふ前書れぬ衣を尋ね煙草あふ入
月よ雪よ雅懐を述べて生涯を樂む心と云々
しよ終ふといふも五斗米のためよ足を繕ら
まて今もこの世を果てに官袴を脱ぎを
好ひしてはといふの需む袴をきつてぬり
息しつる余意限りなりといふも切字の子

法家よりいふは論して初心の惑ひかうといふは
切字なる事いふは衣をよわひと頑まをいふ事
ありて切字れ入ふる事いふは押して切字を入む事
却ては衣を扱ふ事いふはあまの事いふは
大抵その心をゆへれといふは先手う字傳へて切字の
口傳をある事いふはあまの事いふは新式よ切字れり
初心を助ふる事いふは字匠傳ひていふは傳授す
一といふは先教の混沌の回より太極れ一氣のう
こすといふはと陰陽れ海のかまきといふは教の切
字を用ふ時物二つよる事いふは切字と物と對して是別の義
あり事あり切字を用ふ物と對して是別の義
あり切字といふは衣を扱ふ事いふは切
字を用ふ事いふは切字を用ふ事いふは切
字を用ふ事いふは切字を用ふ事いふは切
惟然曰切字節を行きまあるは切字を用ふ事いふは切

不白孔余情をさしあしとあつらふこと

中菊やあつらふ味れ将をまきて

一書よまじこといふ詞をたきてて書林をめて

第三とすと云く又一書よ霜よ能く不といふ

よりの書林の侍を附しり 愚考ありといふよ

よして林季を附しりよ書の然り不より書林を附

よのこいよとる祖為れ歌一流をぬらよ修りて

よる源きよりいふあわ古語曰權花發飯臺秋典

入文門よりいふよあるを愚味れにさきようけて

よ依りのやうよ云崩すを願ふ念れりて勢の

附別事行

麻呂の月袖よ羯鼓をぬらすらむ

一書よ仲實を又龜二年入唐年二十六天宝

十二年皇朝一帰らむとて明列の津よ出て天

の系よりきけのわ歌を詠し又王維の送別の待
りりその以此侍人饑して羯鼓るも唱すらむ
と成り

梅花をぬめをら貞徳れ ぬ

一書よ月を常任不変のめれるまは又季うらむ

を附しり 一書よ磨といふより貞徳を附しり

彼長政丸と号して隱者形うらむまをりて流

糸よ五園の別荘あり梅園 梅園 芍薬園 柳園

芦の丸を此るを梅園のあうひるらむ

一書よ梅花をぬめをらして梅をぬめをら

さうら梅を神仙れ毫疑をりものよりして

三子代茶をぬめをらぬまをさかのうよ貞徳の

長壽るりよりわさハ依らあり一此翁を壽

八十余歳を指りとりとるまは壽といひん疑

といひはれ初るし故のりもよきなり
鳥考の注にのくのぬくまをさへる所を
見ゆ事とよきなりしこころをさへるなり
月を不察る事とよきなりしこころをさへるなり
てを柳花といひ貞徳といひまのつねに
し又柳園といひて五園を定めしこころをさへるなり
注の注るの麻呂貞徳のえんを海へこれと
まのつねにけやまきと羯鼓乃やちふらまの全体
物に注をさへる先を此日の能事と解さし
その日よりのききふを解すしきをさへるなり
ひるまきふよりのききふをさへるなりしこころをさへるなり
らふらそをさへるなりしこころをさへるなり
その日の注のまの日の様義時代をさへるなり
解すし又その能者の器量しこころをさへるなり

さて此柳花を羯鼓に附しるものなり
活法曰明白皇弄羯鼓桃杏皆發又酉陽雜俎
曰羯鼓之音獨大、簇之一韻也、
一韻と云柳杏皆發と云連々述すぬふる事
と柳花をとりて事なりしこころをさへるなり
羯鼓録曰擊以兩杖又通典曰正始漆桶兩頭
俱擊以出羯中号羯鼓全体兩杖鼓と云
雨出ゆり 浅香れ田螺なりしこころをさへるなり
一書ふ事といひしこころをさへるなり
て意希の泉水のりしこころをさへるなり
河原院の子架れ遠竈をさへるなりしこころをさへるなり
蛙を放ち又を宇治の螢をとりしこころをさへるなり
妻よ引きて田なりしこころをさへるなり
奥のききしこころをさへるなり

ころを難すり人々あつむり枕花を二月の季に
田より二月三月も通ふむつきことりし時を季
よりいふころの誕生を季りよりいふころの故も四月と
後ろを附るれ法あり近年季を季度季に
よ崩れしころ附をころいし見えあつむりころ心
得すむころ何のころの大事あり

床つけてころいしころあり男

一書よ巽れぬ月を泣といふより陸奥産の似城
をいし出して田舎客の細るたりく床つけ
よつて後ろを合たりよ同郷よつて群ふ後ろありと
おぼくともいふことと云々次の百を彼後ろ同士といふ
より知き時を号れ中ありしを女れくころ人よ
ころいふことと云々或る親を夫よきありつて賣られ
しゆ縁のころを上げころありよりと恨れ

のころいしあり 一書よりのころにたを田舎れ常
よりして似城賣女と成はらるる甚忌るるころ
て今後身の末とててより忽面を赤らめい
まらく愧て宵のあつむりよ松山れ波うけて
来れ約束をなれしは果るる宿の書あつむり
あつむり誓言をいしてちきりたりよいふころ無
さめをてころのたを打らうけて縁のころか
るるのころよと恨のころいしとの後ろあり 愚者
そのころいし言号るるをたを夫婦りのありあり
又次の注よ宵よ約束を忘るる事とも後ろあり
田舎れれは望気よつて無むさめたりとを
の注款ありをいふ宵よりころ約束して女
のころあつむりしころいしは床つけ双方打
てそのころをころいしころいしは後ろあり

今や心をもとむるを二人とも恨み合ふ事
あり是必同姓の親類なるれと成し一礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜云賣女の
るる事違はうの事と治末云志は違ふ事とす
し礼して見ると同姓の後身ありとす悔
みくつ附言するの白虎通曰不娶同姓者重
人倫防淫泆耻与禽獸同也又論語曰君娶
於吳為同姓謂之吳孟子君而知礼孰不知
礼云是法小妨らるる恨りて望氣の事あり
口をくくると瘡をとりきりらうる事
四日目を敵小首おろわむ
小三太小盃とらむいとらむ
虎注曰結納を海して吉日ありて移りて
をこの瘡を見出さむとて縁談の妨とらむ

よきことちきりては取一きりそのちり
しとらむ次々筆塚防戦の術をけりて
を敵の方一首をねらむと覚悟を極め
此の瘡をそぬれと名を惜む勇將此仲之
次々名残の酒豪ありて小姓の小三太小盃
をとらむとて大将の自ら一きり舞うる
月をねらむの事牡丹ぬす人
衆注この酒豪のやきまきよ名花の牡丹を
ぬすむと志のひびくつや雅の盗人月ねら
む事と心をもとむるをぬきとらむ
今しき酒の事云々 昔言曰花盗人をとらぬ
牡丹のぬしれ心の流を双鏡の地よりいひ
らるる事あり
ふつしとれ丹地花切町

初花の世とや嫁のいづれ

まつしを元くるり樂天の待ふす所謂劉
阮輩終朝醉元くるり建俗語を用ふ所
以を意れらるひも粗くえ傳り祖傳曰俗
終平話とれみえするハ涉りきこ俗終
平話ををめさむいづれと云ふハ
しるるころころ形自のゆふ后地産は
ひ込りのさそ初花の白ふをて世とてや
嫁のと書る本有てその注よ曰初花の世と
を近きといふはささる女よりて五日向
の夜寝れ花やう形をいづれとハいふ
ふアと云ふ 愚考は嫁のいづれと云ふハ
今ハいづれと云ふと形のヨメリれいづれ
地産切町といふ所よわりのけりき婚
礼

を附出さしを無きふをれ産よりてその嫁入
此行粧をいづれと云ふと云ふは此
注者をめてを服用するを云ふと云ふハ
ふりきと云ふといづれと云ふ 魏又不畏と云
書る所の是よりいづれ附子細あり 孝言曰此
附蕉家一大事れ附よりて初花のめやす
ぬ所あり是を親想の附といふ地産切といふ
を沈然とて親すきと云ふハ中ふしを小兒
の墓をいづれ建るものことせれう一第一れ
んる形みふ親し當り死する子を母ふ親
ありいづれと云ふをいづれと云ふハ嫁入を
有りきとの中より立てて左をとりみく
らて無き迅速を親想しづるあり
嫁とめし のさて 七十

一書曰前白ふ暮を忘りしといふより老人
と附より美手い時を記憶もさういふより
ふいふよりれり時を忘りしといふより
愚考七十と切つる礼記曰大夫七十而致
事若不得附則必賜杖又杜待云人生七
十古来稀と云く狭衣ふ致仕の大納言何り
それをも衆注ふ志りといふより老人を附ふと
多きいのみ盲の見といふは魚一是より以下
別ふはる

息をぬきぬき陳海をさの
杖蟬ののらふ聲きく静きハ

一書曰面白き附るれといふ声きく雨降ぬ
ふ系得きぬと字えぬ声一や 一書ふ髪れ赤
くはつるといふより陳海禰師の母といふ

附るり一一漢土のぬらふといふてきふより
夫や子を待りて機を織拵夜を清らうに
して待事する陳海の母に至りて思を深く
述て眼も泣はしつと云く次れ白ハ禰師
のうつて大悟の意を云流しつと生
何の蟬の声より虚ふあり聲をきく一書と
一書曰唐梅といふより中卒れ人物を附志女
といふて息をぬきとて甚面白く婆子焼
庵之徳則志女禰那ふ歸して陳海の傍を養
ひ置つてその傍の悟道をさうみむるを女小
小女をいへて傍ふ息慕の体を教ゆ昂今一同
曰正當徳麼時如何僧答曰枯木倚寒叢三
冬無暖氣其時婆子曰徒二十年来俗漢を養
ふつると傍を追拂ひ庵を焼つと是れ老波をや

附くふむ

風谷と云ふ日黃葉禪師得道

後忽思省侍父母師往到國中一婆子出問何處
來師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不歸師恩借宿婆親為洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運歸去於三里外說与鄉
人去吾母不識山僧但母子一見足矣鄉人報
知其母趕至福清渡運已發船一跌而終

愚老わらうらく焼庵の語ありて以養ひ置くる傍
形らん待ふ及んて戀をぬれとあまんと我子小
美をむとのきぬさるり次は蟬れらふ形ありぬ
聲をきくといひ意味の深き詠を志らぬ光明
藏小曰除海を達磨の骨髓あり又曰除海此一
喝を鳥啄堇毒の如し人を殺して又活す魚
しると華をゆて書一から口をりてい入るる次

原係る地子因て名を得しう唐咸通八年四月十
一日述寸次の句を一書ふ曰秋蟬友の實二句一意こ
前句静さといひれりしうけりまよる句を
らうけりしうけり故よ次此句よその案を張硯
よ文よりる雲水の雅客ありと云く

いとりのる曲侍れ局の内侍の

一書ふ山陰不現をひくといふや小原浄喜此
侍よ見ふ一う一平家物語小文治元年五月朔日
長閑寺阿澄上人浄戒の師よて女院并典侍局
阿波内侍法持よりして同年九月此未小原小山
居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原浄幸万
里小路中納言殿に執筆よて浄製沱水不汀の
檮らぬしきて浪の花を盛形ありて余情ハ
女院典侍の局山路小出て接法み草れを形る

うへて山を下りてさきをみゆをたしめしつゝ御後
 して一人を女院よてまひしすひとらん居り
 内侍りと見えあらまゆ侍るなり居る典侍居る内
 侍居る命女居る長柄居るなり此の居れば内二人此
 居る女院よまひさくむるなりしその侍るなり
 是を一書に内裏上臈の旅形らむといひ入る
 先注をりて女侍ふまむれ偏執るなり

三ヶ北花鬘尾長此有いこま
 一書よふ敷多れ女友並居り侍るまふ家よ内裡
 の勢入合をたれひよまをく下り紀事曰禁裏清涼殿
 南階前有圓籠其籠法家中雲客被出之仙
 納弥市執此事決勝負一書よふ三日よてはるく
 三ヶの津れまらる一くとまぬれりよま漢土よま
 圓籠のるみりり玉燭宝典よ曰寒食の節城

市多為圓籠戲又玄宗皇帝民間清明圓籠
 戲を樂むとあるにやけり三日のるりつゝ
 ちらりみいとむ越れ獨活菊

一書よふ家よまて禁裏一國の産物を貢する
 仲之越る貢はしりの熟候るなり一揚るハ祝
 云ふして聖代のま方ちらりみいとむとま白
 髪のお翁も悦びて貢を貢まきあむるなり一とま
 一説よふ越の獨活菊を越後の弥彦の神事よ
 て伊夜日古の神を獨活をまきらひあすよありて
 弥彦山よまらうとま生きたといひ伊夜彦山の
 神よみ應對して此のりを尋ふまらふそのま
 傳へよ侍るなりとま 愚評越る貢はしりの熟候
 るなりとま侍るなりとま 愚評越る貢はしりの熟候
 出振より越後一六ゆる道のと吹浦讀み満辺

山林の中ふ二ツの小社ありと徃古を大社ふ
して一々白髪明神と一々独活菊の神と
稱す根元白髪明神地主の神とて独活菊
をその境地主をとりて法をすとするり俚言ふ
り以上古此二神甚仲ありく白髪怒はよく
やもすまはく神軍ありて海陸穩むくは作
毛悉失す志のるふ白髪の社も独活を好
むと独活菊の神とを菊て白髪も獻し
謝しまとん白髪よりこいいきみ忽ちつまりぬ
まひて軍和平ふなりゆも法も射るなりきとそ
此例を傳へて三月三日を祭日とし中古より
大礼行をまはる子の老も揃ひの持表末を悉
しぬ百人各種を携へしるも獨活を提列
をるりしく廣布し進子終るりのうをを

白髪の社檀も備へうと菊の神よりの獻物
と稱すりしとを毛を悉しりし時を忽ち烈風
迅雷して根毛を失ひりとるりとるりとるりとるり
星を射るりしりとりて神位表今をんつるりと
多るりりれ小社とるりいきこの祭日も俚俗
独活を備へり小武の并れりるりとるり人を希之
とるりや此前白毛軍れれしやり形も味も
まはるりのを林の法もりめるりとるり心れ
ひきりり神軍とるりしてしのりを附
出すりしのと神ももれいきみりとるりさ
やも姿もうらりらふありけや

杖をひくりる僅も十歩
愚考漢書食貨志曰以六尺爲步これ

十是のよそよそしく十回なるのゆへやゆへすよそよそ
そんといふ意なるの先よそよそいふ所をれ前よそよそ
一はふ光りのを添ふる得書なるの

はくみうひて月とる前すお母か

一書よ俄よ空うきこりりあゆむかと十歩も
色ぬよあまきんげしく降んかすてええ月
のうらみとるをえん丸の向く九きよ無して月と
よそ守すと伝ふるるるる 一書よ僅十歩の君
よそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ
夏の歌あるのよそよそ 愚考世上の説を此通の
よそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ
方一ゆゆの白こま白を解すよそよそ必そのえをよ
し吟味して白昼の動くころころををるる
肝要なるえ来此白れ社まをケテ立れよそよそ

終まよ一きを月といふ字を入れて忘らぬの邊と
ちるをりあまよこれ空をこころよそよそよそよそ
よひうげるよそよそよそよそよそよそよそよそ
一度ありま霰れ本傳といふ劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而陰寒陽氣薄不相入則散而為霰也
よそ疑ひをよそよそよそよそよそよそよそよそ
五歌仙のなる風 雪 霰 炭賣 霜月あり
追加の巻に霰のなる古書よ注釈をよそよそ
ねりよそのよそよそよそよそよそよそよそよそ
よひよれ又よ一ひられ摺りのよそよそよそよそ
中よあまよよ二るあて忘らぬのよこあて出
されよよよのよのよのよのよのよのよのよのよの
集よよよあまよよよよよよよよよよよよよよ
白解をの日本槌るよよよよよよよよよよよよよ

あゝいめゝゝゝを云後曰ひ此癘染あり又冬に日
注解よりを忘るる事と書するも罪をたれ
雲の字より注釈あり一きりるこ古書にの文字を私
よ書改るる事過當をよるひ

ふかわり ありゆく氷のいなはな

一書よ此服亦流して狩の意有天地を破半月縮
はるありゆく氷のひきよ彼ま出れを氷のいな
毒とまゆりゆくあり又一書よ月影のうけ
しきをいなるふ比喩して奪われ余意をう
けし服ありとりぬる非あり 愚考淮南子曰
日月天使也積陰之寒氣久者為氷水氣之精者為
月云々

齒染の紫を初狩人の夫よ負て

一書よ是又素移りゆくて狩の場ありと云

変化してを親想此不をさうわと放ト
て狩人とを附するあり市人の初商を移ふ
意よりして獵師の初狩をふとよきて齒染
此紫胡服よおけりて一とをの門出を後ふ
竊画よふのふとよと云

此の御門をたしあけの事

一書よ爰よを御所よ初春の首よとを附する
例をん服赤れ奏るるこの類あり一北を積陰
よして卑賤の者の通用す一きりるあり一
雲の立曰前より狩人を獵師とをえに古書を
正して武友公事の狩を勤めよ出ると見え
してさしてはを御門をたしあけ此書よ八附
をらるる二白の間よ貢すの意味さうらよ
る一北の御門を通用の出入りあり南門を

紫宸殿の前より清規式をらて是用ひ此
夕突て禁裏御所と目を付するなり

馬糞糞のくわきよ風の折らす丹

一書よ門前の二書糞を掃除の次第なり地紙形
よ竹木をのり并てうきよすりよまほ冷みこのす
むきよのりとし云

茶湯志をくむせ辺の蒲公英

一書よ掃除すりとくありま麗すきを
見出しして茶湯志と附するをまよこく教
不淨よそみてるとをくむ情こ 愚考草
むくよのりきくま学れくまのり申す
蒲公英と定めしりあふくくこの場をうこの
殊よ蒲公英と書はる此学蒲公英といふ人の
う急そめて電をくまのり人の名をく附するこ

らうをけよのよむぬくはきこ
燈籠 つけよるさけく
はけ萩の角力ちくくを撰るまは

一書よ茶湯所よりけくぬのよむとあまこた
利休の娘の侍をくあむくくつけよ二義
あり労気つけまをいこく良種よまを男
あさり又藤丈をハ交藤をゆよとけよるよる
藤丈をくむこの 愚考藤丈を羊れつけあ
るのりよのよむぬる労気あり 一書よ茶
の茶人儒者の娘をくを清らしてお邊を道通
すり侍を附するらうつけまうはくくよ
と種綺よま堪ぬといふまのりらうる
その心を労すらまをれんまをよのよみよ
らうみくかちりく清らまらうつけよ成ま

しと名のあまをたとなつたあまといふるものなり
はくを傳の字ちりりう一とみはりのあまなる一又
源氏よ思石の入るのう一はききまといふるその
すのりこそきききすの義も一理なりと是非をぬむ
あまはく一附の意をもものよみよはくぬるあま
ま一娘をぬくといふて世のゆゑのうきくえんと
誘連てはけみするなりと出さるなり 愚考
此注者白あまよきききく言ひして終よ介及
引入るのれ癖ありて文ををのうらあううををれ
此らうまきけを苦きふるなり骨氣なりそのれ
よむ娘をとさうひはまて世のゆゑの道通とをぬる
そや物よむ娘ものう娘ものぬみ娘世に出一つ
よその面をまといふといふといふ一と一又傳の
字義をあつて作附の字に傳ハ下より上を

一はくこ作附をよより下をこ一はくあま
るりのれよむ娘をいふて十二三娘の一を
いはくの一親のあまをきききものよみぬるさ
やのりの世にぬくあまをよむやう書やう
まの志あまのものをきてはみはくといふ義も合点
のよあま一 一書よまこりれ男よたれもく女の
いはくよまこりいふむとまわりの定めぬちり一上代
よまか源本の類よて思よ女れつて燈籠を捉しと
なりぬ林良材よ見ゆり文わのうはくこるその付
まあむむの 一書よらううけといふものれり
さのめを燈籠の掬極よるうらてみその男れり
一人をぬるわうりて燈籠ようらとる男の
うよりのよそのあま一はく燈籠をぬく守と云
あまの注者いはくし先注を云やうむと

さあしよしの世はあつた
 情をあらたしよより
 まさかのよふきいもの
 萩のふいなきぬよや
 よはげなさいふさぬよ
 まうしとすまふよ
 一書よ
 情をあらたしよより
 まさかのよふきいもの
 萩のふいなきぬよや
 よはげなさいふさぬよ
 まうしとすまふよ
 一書よ

久々の大和物語よ
 昔津の国よ
 親あしすむ女
 望まふ恋慕の男二人
 ありの男とをれ
 ありさしれあつた
 又物をたねこ
 ち教ると
 よいしつらあし
 さらふあさり
 ねとり
 ねしゆふい
 ち事したそま
 と空うねて
 年月をたろ
 うをれを親
 是をえうねて
 生田川の面よ
 浮つて
 水邊を
 対させて
 あつて
 心男ふよ
 のすし
 ちねり
 志あり
 一人
 を改を
 対ひし
 ちろ
 ろ尾よ
 あり
 ちら
 女を
 むさ
 なる
 一その
 歌を
 詠し
 て川よ
 ちあり
 して
 死す
 二人
 ね男
 して
 つて
 川よ
 ち
 一人
 を
 是を
 とら
 一人
 を
 是を
 とら
 一
 人
 を
 是を
 とら
 一
 人
 を
 是を
 とら

所の別當詠歌して
 云勝あけ
 るあ
 して
 やれ
 ても
 君よ
 あり
 お
 ち
 ち
 の
 山
 を
 越
 と
 ち
 の
 侍
 よ
 有
 ぬ
 一
 の
 娘
 一
 の
 娘
 一
 の
 娘
 一
 の
 娘

燈籠うしろの二人の男の侍なり勝負れ
歌うる角力ちりりの趣よ應すこゝろめり
連歌の式目よ曰物りり類故事古歌取
るる二句れか附ひる事ひと云くを前の二句
を何し次の一句をこのちりるる三句よ
れ伏ありよれいしてさるる一とるり
事三句の難ありむとあり一族あり一
古法よ今もその沙法ありそのゆい
よ後嵯峨院の時時前句れ七文字よ何と
トてあやよ悲しきといふ附よ帝
の目上げもさるる何とありさるる
附ひ種強るれ間極く遠乱よ及よ帝曰
西のよよ一きこのよ秘法ありよ民部
云る事よ極民をよ一すれよ一やるり
よ民部卿入るの

何象さるるや小魚手いどやさるるを融
上手附小一とありをさるる侍よそ
るりよや越む二材の山と附くま
戲感頗るり備成感歎す是を本歌
有りといふ本歌る後撰集よ清原法
考也やよ或るくありい二材山
よ手い故小八雲清抄小曰一首れ
て附く例のありまの語三句を
と云くさるるまの附りい
七體蓋さるるといふ角力ちりり
る茶の詩歌ありて後もゆり
菟原血派の侍よを宣うい
歌を附くしきといふその侍
と見をさるる次のる又そのら
山の迹るを

此のさへして志うつきいそひ階一あり志のいそきを
に列甲賀郡くらふ山ははるきこと 昔のま目傳ふ
院と龜つづつのはれよみ舞の感い多し何の志をり
よりのうらむる白紙のまらりやと問ふは杜國云やとき
かうこれ法よりのたのむよきしとこ翁舞入樓娘
よきいしを心つけたりと慶初ありしとより此階を
津國もあはれうらぬをさつりりの男志さひして後
死よ及ひのさるさるをさとりり白紙をいそきかき
この平氏の武士何うの娘の幽霊娼婦煉燈籠
を携へ並りし法の邊をたすきす秋のさるるも
むすひを合さるて一もれよよまをさめこのゆき昔れ
もつとまのまらふ翁のなめ多しとさうむしとる
はゆ枝の白むさねよ對してるれをさるるさるの
帯の四十二ののののののの角力よりぬ出し

まらるるあはれさるりよ合體して階つらるり
志うつきハ階よらふさるりひとらはらあきし白
れ表よらるりさるり二つ利休の娘とさふは
つのはらるりさるりの三白れうらふうら心を
やうららばはららるりさるりやうららるらとら
るり

蕎麦まき青い滋養樂の坊
於月夜双六赤れ旅舞して

愚考り紫雲樂の坊聖武帝行基よ勅進を
して大佛ををはららら一めあふ東大寺の大佛
る所をを移しをらるりの故よ坊といふ又於月
夜といふさるり和歌云花抄よ夕月夜よ對
すりとあらるる人といふとさるり交よらるる
と云く愚考り俊の説いかり一萬葉才一從

故京遷于寧楽宮時略して云佐保川よ
いゆきいゆりて我身くふ衣の上ゆゆ月夜
去く何そ我翁入素忽あくらむや

志のふる孔業として雞を泣けり
人命婦の君より来るむと云す

一書よ雞を泣けり世を悲ふ人を是必やこ
ころのきこゆく形く一しと云て人命婦の平やよ
のたまふく見はき然と附くると云く 一書よ
あの子をやこころのき人の悲うて面中く
いふありのく免来るき事りのきそ悲ふといふ
悲君といふん悲と心得るるを云す

やこのきよめて津波の水よ高きゆす

一書よ米のむらりれを津波のあとの見え
るくく精しくころあり 一書よ米を哀あり

のゆすくみ米と批るころ 愚考 雞を泣けり

といひ人命婦より来るく然すとといひ只人をなす
るふよけるみをはきく大伴皇子の侍と云り
十寸鏡よ曰大伴皇子事あつて雞波の津よ
悲いもつてその中略そのけさ波といふの吹入ての
浦よこしく荒きり供れんくまよふといふ
るく成あひいと云くおよ云言湖を津波ろり又
洪波れ十寸鏡よゆけりて略す人命婦を官女
れ内五位以上を帯を内命婦といふと云く

佛吟よきる魚解ききり

一書よ讃列志度の浦長田の依平惠空上人
魚ありのりくくよ惠心傍於の四依の傳像
くて版中よりのえ出くくくあふ
一書よ讃列志度の浦長田の依平惠空上人

のすめめして一心念佛此行者とあり或時
志度の浦津波よして法よ弁察する程の
暇よりの善心此所の弥陀佛をほめること云
る事あり

縣あり花見次第と作りて

一書よ花見次第と作りて日向國よ何れ
とありつらふ事あり老のありし邊國よ
法をわかつたの花見を傳ふしして名を
まじりし事ありその後名をいして花見
と仇名をとり傳ふつらとあり田舎よ吉いといふ
事あり

一書よ次の畠六なる彼の長老
の地方多くおぼる事あり別よ子細あり

畠邊や矢判の擗めもささぐり
庄屋れねをよみりて送りぬ

一書よ平白のあらぬ長白よつら短白よそ
と一書よ一白あり長白れつら長白の
とあり長別あり一書あり

一書よ長白の長擗よりして長と二百八間矢
の里より日本武尊東征の時矢を流してあり
よのして水の名よ呼まわらる

愚考平
白よ長白短白よつら長白一書あり
とあり袖心の迷ひあり畠邊やも名示のやこ
ゆよよとあり又日長白を尋ふ長白

を心別ちるゆよよとあり長白と同意
のうなる決してあるとあり一書よ
入る白と揚るよがぬを出入りを
るる後を取上よとありれりとも万
一書を奉よすらの族あり笑止るあり

ゆふうりそのめふ華を費しぬ同し面の
見渡しをさく法として文字を改めお増て
況や両頭ふれりてをや家よ

詩商人年を人食ふ酒價此 其角
冬 湖 日 嘗 て 駕 三 鯉 翁

さのぬると服を白ひと揚句よ

詩商人花を貪ふ酒價の那 其角
春 湖 日 嘗 て 駕 興 吟 翁

さきさき首尾連環の韻として別の類向を

ゆくめさうゆふ回意の格式なり於五巻目れ
揚句此系トよ書一 一書ふ矢判の里

庄屋の庭前ふ大きなる松育てせよあらし往
来の旅人求めて見物しけりこの草保年中の

焼失よるくるありしとてさきさきその松よ對して

待歌連他の風雅をもしいれらるとるる一
持し子も紫荊長よのひつゝむ

晦日をとさつて 刀賣 年一

一書よ老松の壽よよせりて歌よみそのを不
圖吾子ののるををれりぬ出つるさるるの表の

ましおろしう余美るく捨つりし子も今も
定て成共して紫荊かこの業のやあらしむとこ

いさこの子をんふやふふさるるりやを建といひ
歌の意よりのおひ出さるる心又小町ののころよ

我さつしを却よ何りとと塩の万のやをまきれう
らの松を去りし此歌を添て小町を捨つりて

ありきさきさき松の一字よの解し使りあり次
のるを浪人の美ふ絶りて童代の刀を賣

て年の用意をさむとるる

實に狂吳の國の筆をめぐらした

一書よ一書よ名刺をてし能く刀を賣て世を
風流の道人と道々心より古人の詩をこれ
もい出さるる惠宗此詩よ筆重吳天雪香輕
楚地花 一書よ東坡筆の侍りてゆきの
あしこの賓客と將しつる吳國の詩狂人聖の
無よ筆よして訪ふを秘藏の刀を酒よ代て餐
應寸信友の交わり侍よ黄金不多交不深
とよしつる人の朋友よ信るまき人の侍信を
減めつる丁吳國の筆とよ言麗々立朝鮮の立
東坡筆の數るつて 魚考先注の刀を賣
よ人の侍をこれい出さると多非るり向ひ附て
風狂人れ来まらるこの後の注の賓客よ又非るり
朋友よ信何まんとつて秘藏の刀を酒よ代よ

お遠らる一彼刀を賣て年用意するおろくその
東坡筆よ心符りて風狂人の来るをめぐらさく
よららひてりてる年をさるるの云友をさより来
よ又よのしつるやの語よも符合して一陰風流
よえゆらるり此刀賣年此年といふ字をい
えつていふ言をハのよ

襟よ言尾の 斤袖をとく

あし人と指を指よ吞かさむ

一書よ彼電見れ狂人よ言尾の斤袖を
切て襟巻よあしつる後よ無ある大し心と
全盛との仇らら一るり次の台を則揚屋の
侍よて言よ劉伯倫の詩の意るとを重
つる劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死使埋我

芥子此一室よ名をさるす祥
無味堂曰色悟も懲るるを祥法よ悟して
一休禪師のいさく成道るる時艶書よ
よそ一芥子一室むを添て本末の面目坊の
ますりく一目りより名とるるるるの傍
みも似る

三日月の東をくらく鐘の声
秋湖のすくく琴のすくく

一書よ一室の芥子よ祥の采るる黄昏時
三日月よ鐘の采るるよよを宵次のる西
山よ三日月をくくめ東よ晩鐘をくく
湖上の流舟書を惜みて琴弾すくく
る心 一書よ芥子の一室よ入相る法行を
常の心るく心次のるる三井寺とけりて

秋夜湖水よのそみ流風徐来水波不
興飄く身め遺世とるるよ赤磐の松
をよたのい出らまていよひのあそひよ琴
やるるく心と志きりよ室て忽僕をくく
その琴ををらるるをひくとすくく
るのまよす千眼一統の場を打はるるまて一
端も興よ室て借られく借りてまら
時まてや興をいれていよその傍くすとい
例のものぬこ向上の身長みして尋たの人
のたひひよるるるるるる 愚考一の空
やう思お遠きり三日月も鐘の声を西よして東
の方をくくといよるるり次のるる三井寺
と定て湖上の琴をを宵といよるるの白虎通
小日琴在南方鐘在西方琴くすといよる夜

ちし同一を弾く寸をいひるなり返却の意
よひのそいとくらの歌一源氏松風の巻よえん
のひのそいとくらの歌一又志らぬとくらの
ひ引く一そのおえのさくち一あふと云く夜ふ
日琵琶をとりのよまて姫君よあてまはるる二返り
んうり弾めあふいとくらの歌一あふ一あけ
唱歌まらふんやせれてこのきこく一しし月一いさのこ
やらるるし時うはる又論語日子与人歌而後必使
返之而後和之

意あふるをゆるしてをせを放り

声よき念佛 教をゆるいづる

一書ふ若く琴なりして借るれとも弾くそくす
といふをきく一ふ借てそのをせを酌するそつり
これとも酌得て見違はばや喰ふ心そくして

よりを差るる助け得るす一と教生の白ふ依
りて心不共のえ蔵を見きりるる一し次ハ
前白んをを放つといふより教心のくしちを見
きりるる略

愚考白虎通ふ曰琴禁也林示

止於邪以正人心也又風俗通ふ曰琴之為言禁
也雅之為言止也言君子守正以自禁也夫以
正雅之聲動感正實故善心勝邪惡禁又樂
書ふ曰琴動天地感鬼神その同くはら
るるをいづく度もく引く一寸を不のくも服より
穿流るるも終日泊りて今やういらむと
すら湖上の曲声ふれとあき春れ魚をの
ころらぬ湖中一歩ゆりるるもきよて琴を
徳んるるもきよるるもきよるるも又なるも
いよそのをせを放らるるそといふも教裁の

意仙を抄写してをめて後世をてん教を伝へて
教生をてん其の徳やありこと善心よひらうとて
旅ちゆりて又意仙の徳を伝へていぢりて
と意仙とて申のんを語れ心を改悔せむ
无琴をてん聴く意仙のまきこのゆいよ前白言
て後白奪入りてのんは是らるるをれ日三四の要
六の事 花 魂 心 船のかけよ
その意の目んを我をゆるり

一書よ西行上人の心をもてて
死ち心そのまきをてんを月の上る二るとも
その歌れ意よくて祖をその日んをゆるり
おのむきあり 魚考揚るるその歌をゆるり
も入りていふまき花の白の全体西行れ歌る
のゆいよそこを翁の引色みりて休りよ

山家集よあくうり心をもてて
ちりる心れらそ身ようの一手此歌をよく味
らふ一一人れを隠りてそのをれ目と味
あつりて見る人の目くららりてと見ゆ感歎
すらよあゆりあり但一首ありて二首と見て
後のとてんりよまきをてんをてんい
らふよ波津よあり火焼あますけとん

一書よ万葉集よ九れ歌雜波人若火焼あます
けとんれと已の妻あまそとめは
炭賣のたのの妻あまそとめ
一書よ汝のすきつひよそい申き炭賣れま
まきといつてそあまらるるあまそとめら
るる心とあまらるるあまらるるあまらるる

ぬもろく物くひ又回書よ草系ふを田よひのせ
て里音一 宗因き山れ松も増みしてゆき
海一 專順 かの里の芋植搦つる
多られ第三のありありのありありのありあり
減よ第三のありありのありありのありあり
三よありの論ありと云く 一書よ是を五文字
級名の第三のありありのありありのありあり
又備たれと云く 一書よ是を五文字を
よりてのありありのありありのありありのありあり
七ふれ位ありを心ゆてのありありのありあり
愚考の後の論一向よありありのありありのありあり
ぬ十ありのありありのありありのありありのありあり
いありありのありありのありありのありありのありあり
といふ法よてのありありのありありのありありのありあり

るありのありありのありありのありありのありあり
とて第三のありありのありありのありありのありあり
筆法をて却て字とりてのありありのありありのありあり
ありありのありありのありありのありありのありあり
何つてありありのありありのありありのありありのありあり
て第三の本意とすといふありありのありありのありあり
安く得らる一 近きありありのありありのありありのありあり
ぬ此書をて心付つき事あり

鶴 窓 月 窓

一書よ花蘇を窓先の生垣と見えあり
る書よのありありのありありのありありのありあり
もれありありのありありのありありのありありのありあり
幽入林和清の侍をふのありありのありありのありあり
と云く 一書よ花蘇を窓先の生垣と見えあり

の傍やいありきよる潜ふよりぬありて勢を
附しりるりの焦氏華乗よ曰鶴愛陰思陽
易ふ曰鳴鶴有陰故从雨鶴好霜故从霜
さよとてまよふ附しる雀るり附ふ雀るりつ花
の咲るの系物るり十月花をこれいともあり
風吹ぬ秋の日籠ふ酒るき日
一書ふ秋の日のさひしきふ冷もつらん籠
の酒さへりて寂莫のさひたるりといふ
あやう風つらぬとる大ふ非るり秋の日れさひ
しきおろつ籠の酒さへりるきふ別秋のほ
まはるる吹すといふるるり必ふぬよる
羊のぬとあつし又一書ふま五柳先生の傍
ありとするる彩し非るり
菽織る 笠を市よさらす秋

一書ふ菽の花笠とするる非るり菽と菽
この旨し遠いの一書ふ酒るきことりるり
菽のて造る笠を市よ出して賣らするこ
つらつらる振賣ると同前るり
加茂川や胡麻子代系微道
一書ふ上か茂の川上ふ指荷の祠者此神の
好ませもよとてそのあつる悉く胡麻を搗
ふ一存も搗るるる一故ふ此を搗るるを胡麻
子代系と云るる一又子と母の社とありて
一書ふ前白れ笠を笠のほらりゆれと見替る
ふ階るるし指荷のるか茂の末社とて九月上の
午れ日よ此まよ
いとららの舞あつらつら
一書ふ岩倉る鞆る近き雨あつてか茂も云

人言も流るるありそまを鼻の覺悟として
のそ必聲も亦一とあり附るあり 愚考岩
倉も四方よりあり加茂も附るる則小岩くら
るり桓武帝王城法護の爲よとて三空を
埋めぬひし地有り

おれより子布橋歎ふ笑もまて
うきまをいらを然も上平

元カホ

一書よ笑もまてとより悪女を附るり三平
る三平二浦とてこは前のるり 成美曰山谷の
詩よ三平二浦過則休 愚考二十と附るり
る礼記曰十五而笄二十而嫁故あまこ二十三
花よ泣橋の徴と捨よけり

一書よ橋のちり跡をわたりくらへて去の
花を祝想しつら附るる心或智識の曰仏

冬四十九

の法も懲りまよりとふしありとふしあり
よせりまよりとふしありとふしあり
一書よ橋の徴る夜のありるり夜の敷ま
能も有りとて愚考亦白杖よ居て花を求め
あふる祝想心裏の妙華よりて以心傳心大切の
陽と暮とあり現ともあり探り得るり花よ
と叫よ拍子よ彼納豆をくく考よれと
ありき全心のを返してまて人皆を花よ
橋よ懲りる妄想ありと亦捨るる花よ
泣と虚よ流るありと次の後者その胸臆
をひらふ心と歎きのうはまる水を進め
るらとて減よ蔀水育心のま白感歎す
よ絶るり花のこいと讀てる一白れ情を勿
論若後のうはるりも是はるる必

懲の字は書換ふ宛あり

僧ののいふに歎きをのむ

一書よ花の親愛あり世言祥師ををん出
くまきむ心傍正遍照いふに良峯の宗貞と
やち一時感色をうむるなりたまん帝后の姿よ
て歎き色のみ衣ををりまては崖の中よは
くまきん宗貞げきうくまきん宗貞ては善なり
くまきん宗貞山吹の花の衣ぬくやまきん
とまきんくまきん山吹の山吹をい
ともぬらく泳ぎあり虚栗よ山吹や世言祥師の
袷衣よ下衣の疎礮色をくまきんくまきん
ゆのく此るく山吹のくまきんくまきんくまきん
一書よ香しく候くまきん山吹の香の或るくま
るりく一葉銘と見えん香とくまきんくまきん

とまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
食歎の軽あり奇哉納豆をくまきんくまきん
魚をくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
歎くくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
このくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
のくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
のくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
樹中一椀今日誰共困是を枇杷有り又新後
拾遺集よ山吹れ花然波もくまきんくまきん
はくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
香の親のくまきんくまきんくまきんくまきん
のくまきんくまきんくまきんくまきんくまきん
時鼓周湯葉待字士者飲麒麟草此亦東
坡の門冬之飲等其例かきん

白燕のしらぬ水に母を洗ひ
宣旨有り

一書小白燕を深山の落澤の比に栖るるれ
く山吹のよふひより水の流るるの影を
しと心本草云人見白燕主生貴女故燕名
天女次多洞冥記曰漢元鼎之間招灵罔有神
女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳
中猶見此釵宮人謀欲碎之明日視釵匣唯見
白燕升天 一書凡燕の一名を天女と云ふ又白
燕をえまてん貴女を生するといふ故事あり
るりその貴女ありて釵を鑄よと云ふ宣旨有
下りしと傳ふなりと云ふ此宣旨有りしと云ふ
てりみ新史のものをと云ふと云ふと云ふと
ゆりのえと云ふ釵と虚みゆりしと云ふ例のゆけぬ

しらぬ水

愚考れりいふと云ふと云ふと云ふ

事や釵をそのの魂をよとて此を女を生
をれんそのを女よと云ふと云ふと云ふ

成美曰西京雜記曰之后在家嘗有白燕銜白
石大如指墜后續篋中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合之遂還入合乃宝釵又遊仙
窟小白燕飛来白玉釵 一書小白燕を日本に
るるを云ふと云ふと云ふ 愚考非なりを白きりの
を稀なりといふと云ふ 既小景行天皇八年天智
天皇六年清和天皇八年白燕を獻るるれハ
燕雀の類なりと云ふ事ありと云ふと云ふと
ゆりて倭姫あり和漢語云曰き女の部あり
伊勢齋宮神道之大祖也日本神道以天女

為根本則天女と云々倭姫ありと云々日本神乃
の祖よりして神歳五百余歳ありて石隠あり
今此隠之國是あり本朝皇女之貴女と謂つ
へ一於委しくを倭姫世記等を引して
いふひををらす一とて云々云々
多野の宮より三年此云ありて既降り
日よありて天子自以根を此宮の以宮に神
加ありをを別まのみくといふ根を串あり
最あり伊勢の根田川を倭姫の根根を
ありありありとて根田の神社あり

八十歳を三つある書母 ちち ちち

一書より叙を鑄るといふより初符以即位の以賀
と見え入法固より長壽の人ををりて熱向又
老業子の侍あり又そのよの書あり人余

ふりて云々といふ 一書より八十を三つあるとい
へん二百四十歳その書ふ母ありと見えて云々
一又上の八の字を執筆のありありといふ非こ
又八十氏川八を奪るその教ありて只数の多きこと
いふあり又七十三ありて八十を三つある八十を
三つあるといふ説あり是よ云々といふとあり
号皇曰多喜安元法眼のみの語より白燕を撰去
すありとあり肥熱城中より白燕あり城へ出あり
るあり予云々といふ云々云々の白燕を云々事
三夜法然上人の説として雜事を集りて書れ中
より曰大和國竹林の叢上よりおいて勅して神武帝
の玉釵を鑄ふ法固よりありて百歳以上の
男子これ親をありのをを集て是より役あり
是玉冠を鑄りの例あり竹林叢を極て美

比るもよそもの我家よ佛舎を因ら心事を欲
す下畧此古史等よりして此三句れわたり物れ不審
もるり一八十年を三ツ見り意と依りしるを冬の
日つりれ曲るるり冠収るるり四者一今を百
年といふ壽めは〜とすまこと世下をて天地の
氣弱くるるり〜とすりて人間の壽命命一〜と
るり〜りを歎草本ともよむり〜よ不及〜と
るり〜り此時代をてそ人そ生り〜りてめは〜
〜めりりり〜とす 愚考の白燕の殺るを女子と
一八十年の附よ〜とすり〜神武帝の玉釵こと奪ひ
そるるりの前よ〜り〜信姫を信く神武帝を
〜信亦然よ負ぬや〜り〜信らゆ〜信よ〜
親考し〜り〜り〜り
るる 子ららそむか七々れは

一書よの志某の孝よ織女の不孝との遠はるか
ら心織女を天帝の娘河西の宰牛と娶い氏ま
より減るもを〜して父母も〜と〜天帝大よ
いりり多ひ中を〜して天れ川を隔て七月七日
一夜のみ〜るるをゆ〜り〜と〜是則中を断
神らる〜む一書よ二百四十八の巻と〜り〜人
よ〜り〜り〜り〜仙人〜り〜り〜り〜り
と〜り〜り〜り〜表よ林和路の傳も〜り〜り
その介よ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
附〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
妻の荒淫〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
夜をゆ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
初りと依り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

愚考の媒神のり〜り

濁りを替へし中引 神りもろくしあつた中
隅ちの暗きりよしてゆらき

西南よ 桂の花は 片不心 時

一書よをる七日の月あり一桂の花を月の
るよ一て花よ 喩るく十五日をま盛りて七
れはをいりるも 蒼とよまそりてのま 愚考
三日れまらも 蒼といふも ぬ何その本源を乱さ
ひしての杜撰あり七日の月を押して月れ蒼と
利はよ 依りての 沃を七日れ月を一日の月と
十五日を月華ありといふも 蒼といふ依りよ
蘭のありてん ト本うは 愚

一書よまま 秋の階あり 葉油葉膏とて葉れ油を
とりりあり 陳菴器よ曰葉草生澤畔婦人
和油澤頭故曰葉沃秋の夜の長をまてく夜を

つげて 家業をるす 市井れ人の油ありまきまかこ
綫の家よ 賢れり 女ありて 神あり

愚考 琴操よ曰孔子蘭の独秀るるを見て歎いて
曰夫蘭を王者の香ありとて 琴を 鞭す此曲 猗
蘭操と号す淮南子よ曰蘭を男よまてて花
をうまらんしとて 香ありとて 女子をを 檀子六
花をよまらんしとて 香ありとて 女子をを 檀子六
賢れり 女を 綫家よとて 附するあり 次
のまそめありて 美女れ 情あり 偏あり 一書よ
江口の君の 情ありとて 非あり 西行上人の
口の 寄よ 一夜 寐あり 是を 見して 之を たる
よらんしとて 一

一書よ 抱き 麻疹のあり 一書よ 二月を仕

て後ふるるる一粟洗ふ上梅子のながり縁語めつて
一入ありしる

報手向致 弁 慶 此 宮

一書ふい布り正月の陰抄ひふその國俗を
陸奥の果るまゝ見出して弁慶の宮ふ祿
樂報をておして手向ふるる一説ふ米珍
るをて致ふ包て手向ふるを包手向といふを
おそくくまゝあつて

寅此日の旦を報治れ表起て

一書ふ弁慶の宮より見入て刀工の武仙
を祈り名作を報一むとたれひよせ寅の
日の末四ふ文を清めて系信の安
一書ふ台命を象りて急所の叙をて打
と意叙を起すに私のちろくふ及はされ

冬五十五

勇者の社ふ新語して寅の一字を新記の
箸をくむ 愚考の急所の叙とをゆるすを
を弁人う則名有り于將莫耶天國正字ふ
の弁くをその人の名有り私のちろくふ六れ
よひうくしとをゆるすをさよひふ人ふ台命
をやくむや又寅の一字を新記のひききそ
をふしは考れ褒詞有り夫天を子よひくけ
地を垂ふひらけ人を寅ふ生る故ふ子ふ所寅
ふ起るる天地自然有り寅を猛獣うして終を
司り故ふ寅此日を祿ふる刀工の考るる一
寅年寅月寅此日ふ弁くを刀を三寅と号し
て伊豆控現ふ納むしと有りせりん 寅ハ
一合れ眼あり

雲一のうき 南 東 の 地

一書に南ふふ南都をいつらるる一書
を刀工のまゝく有る事と云ふや雲く
きる皇都の地るるけし崇教の初るる
一書に于將をたれいよを南都の地と
らふ南都え来呉の地るるなり略
呉の于將を非るるの野刺刀を良刀
必定せり

わうきこして讀とるる人の像

一書に善良れ所を僅とるる一書に
て在る太閤秀吉公の如く大納言
の像るるを今も所の表文と
思ふ芥よりり下別論あり

心の方なりし字押 やりて
福らまぬまをまらむらぬ

一書に神祇の名跡をいひて
安るるむ次をその人れいり
りて二白一書なり 愚考
武士の建てて禮の上よ
士もなるる堂上の侍るる
禮ふといはしりものこ
物衣の侍こいれん此三
衆物語の侍いふれん
し物や神祇をえ送るる
るりし字押中のの
季よむすむて子細あり
ては月う七月ふあつ
といふも四月のうら
ては別記にれうらるる
鶴百韻の中ふ

——論す

田家賦を

霜月や鶴の行くをみるに活て
冬に此朝日此 何んをみるなり

一書ふ此服を余情紙毫ふはくくくく
の日は歌号も是くく増くくの——やきき服を
いく度と此をを味ひてすくくよきこと 一書ふ
その服足就る説ふくく——めて氣のえ出——やれ
きくくく——みくく此朝ま——ゆふくくく
きりと只流くく云流——やきれくくくくく
此をくくくくくく古代の歌の上此白ふくくく
侍所れくくくくくく心くくくくくくくくくく
くくくく 一書ふ鶴の行くくくくくくくく

よて白ふくくくくくくくくくくくくその氣服完て終く
それをしてくくくくくくくくくくくくくくくくく
い——くくくくくくくくくくくくくくくくく
却て第二義ふはくくくくくくくくくくくく
是かとくくくくくくくくくくくくくくくくく
すくくくく古今此歌説あり故ふは神ふ歌号の
訳を論——くくくくくくくくくくくくくくく
又服の白余情紙毫ふくくくくくくくくくくく
是を解きくくくくくくくくくくくくくくくく
文盲くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくの本侍あり若くくくくくくくくくく
——是余情の何んをみるなり鶴を水鳥暴強集曰
水鳥者稟茂鶴鶴亦夜鳴又禽經曰鶴伏鳴則
陰仰鳴則晴又酉陽雜俎曰蛙抱聲鶴抱影夜半

よ吟のうらうらとして行くところをひきかきつるを教へき
分論のうら首うらうらうらうらうらうらうらうらのつと
さ日の教へをうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
余情をいらし海よりおよりいさききりさるるを連ハ
只物もれりなりと云流しきりなりなりとくして
二義よあやはいよあ鬱抱教とる是なり

櫻核 山家 此 侍 を 本 紫 降

一書よ二るよ場のなるれと書三よその場を定
ころるなり 并三茶の論とお外し 魚考一説本紫
かりしといふてのまをいして書しといふを非なり
一るれ讀よ先心を付し一木紫なりとよむ白
るなり降るを眼あつてを過去なり櫻核の表
よ凍てありあふ教をうけてもあつと教日のらり
うききるなり木のこの降あつてありを山家の侍と

見ても死るるなり田家の庭前なりうら本紫のうら
を見よと山家の侍なりといふを依と只侍と
りよ字よ眼をよけて味りよ

いさきはらうらうの境よ不きはら

一書よそのおらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
の吟時なりうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
てあつておらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
もいさきをいさきはらなりなりなりなりなりなりなり
沃を解す一きりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
さるらぬの趣向をよらうらうらうらうらうらうらうら
茶降よふといふは必ず申しあつてなりなりなりなりなり
必定なりその色よむらうらうらうらうらうらうらうら
とるうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あつてその罪を犯すれみ

杖に旅の比連敷いとくわよ
謝)こゝまで 富士 見ゆか寺

一書よ前白れ茶多々席上の活花るり家よそ
比上流に下向後沢松新ちるを其見の間の比連
敷るるむ 一書た比連敷といふより活見ちり
そりりし場を究て三國並双の不そと増り旅
の一書よ力あり 愚考活見寺と云ふるもそや
いなる事ハ先往をそのやういふ云ふもむむ富士
見ゆり寺を建しとててよといとたひめてこの後
河の内れ寺をくハ活見と云ふるもそりりかゆ寺
よそよより一白うといてそ決して海ぬるこ
又うこささふる事ハ後のるよりて定りこ相刻
りりて見る富士ゆつよ謝)とててと力を入富士

見ゆり寺と云ふ禁しりるり一白の雪のうとさきり
上よ東海道をよ見ぬここれりるりりり次の
白るあよ海あり

寂)とて様の花の 落る香

茶よ茶持をそむり 冷の香

一書よ茶のうりよ茶をを海りといふるをいゆを
ハ云りけしるこ様よ掛竿此余情もあむむ
一書よ茶持の立れりり兼天のさるを併てそ
こよ茶葉の自ひをりせしるり
いつても非るり茶のあよ茶持のうつよ法をゆ
茶の自ひをり吹き守といふるあり

旅 遠よ 鳥 帽子の女 五 三十

一書よ家りるる義仲の御持よ巴山吹を介
の女中れりるる鳥帽子持衣るむとをそ

はるまじく牡丹の侍をうむ

庭よ木草 けりまのの落衣

一書より近代のもの法度方のけりまの落衣よ木草を
或る木草の落衣の色を庭草よけりまの落衣を
庭向よけりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
木草のけりまの落衣 一書よ木草山の落衣をけり
らまのけりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
まのけりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を

庭よ木草 けりまのの落衣

成美曰古今集榮雅のけりまの落衣を世俗やふ
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
知波素其形状亦古今云敷柑子なるり
愚考八雲御抄云山々八十を牡丹なるり又橙之

と云くさき事ん牡丹の侍のけりまの落衣を
をけりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を
けりまの落衣の色を庭草よけりまの落衣を

庭よ木草 けりまのの落衣

本草曰利筋骨去湿焚消水脹治霍乱轉筋脚
氣瀉痢腰足無力又轉物志曰木瓜味酢善療轉

筋の轉筋時但呼木瓜各亦上書木瓜之字輒
愈留小落花多落梅の曲るりの公卿の因人よ
てたひすりるりの志路の比芳をいふるり来るる
とたひいほげて行かると小書ひるるり山つる
よそ人よええい群よ木瓜の花の盛よ咲て
ふをてえ籠雲より出—まらるるりよ剛さん
るり—多りて持まよ秘義の笛—と一曲たひさり—おら
らりるる花を留るりの重—お掃ひまよ侍るるる
—木瓜といひ山間といひ—こ—鬘固の武士の心
智をたゆらり—るるり前白よ不吉の落花は
是ハ次よ骨を見てとる附まらるり
と食の 養をてめらりよとのくめ
一書よ骨を見てとるよりの戦場の侍と見て
その由緒の人のとくろるを葬らむと心替そら

よ各合ちるるる食の養をて交て骨を包み
てゆらむとす人の侍るり
沈れ上よ尾を引程を捨ひて
愚考骨を包むといひよ養をて与—たのひけ
るるり括ひるるる程を包むと奪つるるり
此外よむけ—き注釈の事とるるり及るり
浄幸よ進む 水れみらるり
一書よ美濃國養老の流るるるの浄幸と
見出し—活程を献ふ余膳もあむ 一書よ
魚をゆるといひよりの一膳—て川猪の浄毒と
解るる泥のひきよ典業改水毒を解すは
るるりををるるるとるるり— 成美曰
続日本紀曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不破行宮留連數日因覽當老日都

多度山美泉 自盥手面皮層如滑亦洗痛所
無不除愈云々 愚評い法事も是兼行一未去
りあり寸 愚考小角豆炭圍芥子ゆり蓮の
実月の帯狐釣杖此七の杖を法しし思ふみ
る旅の侍りして記りを書るるぬ一き事ハあそ
川特筆情の以事とそつえぬるりのりまゆけ
何れ以事るるむる天子るる一行幸と書つきるり
露 おく 狐風やう乳 一き
愚考時序を冷を愁野于る雨を悲しむ欽明
帝十六年世于とキツ子とそついぬ一五雜俎
曰巢居知風窠居知雨狐を穴よ居るものるま
と雨をうけしふ等るるを風をうけしふる夜も
涼更ふ及ひ秋天流りて玲瓏として露の
一面よ墨わししきるるを冷風さるとかき

たつやまをのむむく白化ゆのそらしとあつ
あをぬるる雨のそそをううういして己の窠り水
の何れまむるるをうけしふとそそ穢よるる一き
一るるりそそしあの七るるまおのしきあしれ
往るる何れまむるるをうけしふとそそ穢よるる一き
何れり何れまむるるをうけしふとそそ穢よるる一き
をて失ふるるもの
豆 腐はらりて 母は喪よ入
え 改の草れ杖を被ぬ一
一書よ行旅を喪家よ見替りて古代を歎と
しり替りてううひきしよ造るるのそ大和國をそそ
る上代の送終りていうるるを喪者よるる亡去の殯
を修りて喪中篋りぬるるをそそ母の喪と云
よりえ改と見定て附らりとの彼法師ハ甚妙よ

孝心ある人よめて蹇の母を負ひし身延山よ詣り
紀川の宿敷世よ祈りて燈流の才物法華一派
の師あり初状を統徳逸傳よよ書し
曰之改を素根彦の家士俗称石井平之丞二十六
歳よりして薙髪を僧深孝智光寺を草創寸四十
六歳よりして寂

伏見木 懐 の花をうつ

愚考深孝の花を伏見木懐の入相のうみよ
花やらう守と伝わり深孝よ墨染梅とて名木
あり古今哀傷の部深孝此世辺の梅し心あり
らえきつとくしんりりる墨染よきけそ八園融帝
のふまきとをひきり何ぞ梅のよめりかろりり此
歌よよりてすみそめ梅とて名つけし一あり
東懐もくユワタとよむし一万余よ強田と書る

志きぬわ

いそらうのうき男猫ひらを推して
妻の志すすれ雪んきんをよ

一書よ入何ひの次よ男猫のうつらきりを女
友の多はねさるよより次れ白を猫を
き氣をねそそくまのゆ一雪掃をよようつり
家よめ女三の宮の侍るもあむ心り 愚考
男猫と押出して白伝るま妻の猫の本懐こ
まら男猫女猫を志ひ林を女猫男猫をよ
水子や秀台れ雪若やりよ
山茶花よわよ 笠の木うし

愚考此二句則冬れ日一部を巻納めしる自
ひりして首尾連環の格なり巻改の狂句の
二字よ對ししる秀台れ二字ありきま六狂句

の二字を大切の字眼をうへ傳ふ曰揚白ふ
はしめて物を起さく出の揚白をうへめてを季
を出するるる二白一書ありて巻改の本うら
し服の山葉花を念きて書白れ屋を狂白
の連環るりのゆふ格外の格是格を出てう
めて自在をゆらとる此るるり近年れ伝書ふ
揚白ふはしめて書白を出し或るるり一めて
季よきふを起するるを傳の族るり一白一揚よきふ
一巻のりもさよ交ふゆらさふ出の揚白を去今ふ
例るるり一格るりの格弁弁ふふ去を浅とる
いふるり取存りや書ふるり一う大切の要るるるを

追加

いふふえよと雜面うらうらをうらうら

一書ふ牛の祀きりのふ霰の烈しきを統
白とちり電者砲也中物如砲也下略 愚考
夫木集ふ荊小田の晴の上をふら霰玉を
てるるるうはらとそるるり又行助此古歌えを
いつりるる玉をりてるるを因神の霰るるを
といひ連歌といひ只一白のむらみふのみ
執事して殺伐ふ落しそを我祖翁の
多りしてりる仁徳の境ふ入るひけさ
蕉風の世とる一統をり古くり肉をとる
りのを常りしてひらるる字をとる入りの力
はよくして魚るりとまをるふ事ありて
むるいり形とむと牛のほとるりふのふ打とる
はるるりといふるるるあつきの年取るり

檜火ふあつり 枯系れ松

一書よ牛追の聖宿あり余津ありて
油をくを蛇虫一附出守ふ牛十をと
よ追り何蛇もて牛の骨までねま
治の皮と守牛を煮て負ありて
依れ篠藪よ芒ありて書ありて
と接ひあつて焼く酒を盞の底す
め煮て休むあつて樽の傍ありて
牛の乳ありて樽をまらちの末
形跡のほろろ煮るあつて見
一説よ曰樽を火桶のらちと
お出りありてそを樽火といふ
酒を煮てめて煮夜をよ煮る
よの古俗此のえ火をまて樽
て樽火焼付よ樽火よよれる
と此樽出

人足の者の細あり根ありて休
のありてまきハの樽火を松
煮よ焼焦しつるあつて大
はよ煮ありあり

本絨荊十煮よ髪を煮まむして
一書よ髪体の白うして本絨
煮るあり茶葉先煮る油を
なるあり煮まてつるあつて
ろく心 一書よ樽火といふ
焼るありの神ありと煮て
煮るあり 煮るあり本絨
る赤るありて煮るあり白
の法法をいふ煮るあり先
ありれ煮るあり

松笠よ宮をやはす 形 露

一書よ山路の体よて用明天皇いさし皇子よ
てすししきり時彼玉代姫を意多ひて葛よやは
しきり侍るり 一書よ宮方れは露のりりて
供養の人しはり 安ふおきてりしは侍るり

銀よ塔の心 月を 海
ひよりよ橋をすらす岐阜山

一書よ大塔塔るりの深淵とえ之て銀よ
恰曾よ心と形く心次々焼塔の素名と定て
左よ橋をすす右よ岐阜山をるる眼前之 一書よ
表えりりれ時々名不地名を出入る是等蕉つ
の存るるり

附て云冬の目多詩六曰次韻の風調ありてた不
よその人れ解すつきりのよ何れと書置しりり
さるを種くの注釈出来りて却て俳諧を害ふよ
至るおもかりん故ふ難陳るりしはきよ及一里上
れりりも殊ふ心りりきと古集の解しりりひる
介れえいあの上よ及よれ侃もるりしはたよよる
えをまをいりあとして言結めむとすの筆鋒の
もりりんきひりきりりあもさるるりりりりり
りりりり私の宿意よありりりりりりりりりり
りりりりりり

落注
形 莖 花 ちりり け 六 五

愚考 赤白縣 少花 足次 序を 巨燈の 大家と 見
て 赫肥等 花附るり 見原氏 木曾路の 記曰 美濃

加納より西を平田よりして野系形一少馬小
飼より一手草形一田畑よまむけ花とりよ子を
柱て株と寸又を荊取て田肥一より寸能紫
よりを宝蓋花とりよと云く五形草と伝る
をよりを俳諧の虚るより先注のまくく実ふ五形
草と見えて荒島とすよりを云語田の癖案
國法をよまらぬ罪人あり